



## 〈一冊の本〉

神谷美恵子 著『生きがいについて』  
みすず書房、2011年

1,600円（税抜）

本研究所嘱託研究員

岡本洋子

（ソーシャルワーク論、  
精神衛生学）



「生きがいという言葉は、日本語だけにあるらしい」と、『生きがいについて』の著者神谷美恵子は、本書の冒頭に日本人独自の人生観、死生観に言及している。精神科医であり、且つフランス語をはじめとする語学にも精通していた著者は、深い洞察と探究心からまず、言葉の意味と背景からこの生きがいというテーマに臨んでいる。

著者がこの「生きがい」ということを考え始めたのは、20歳前16、17の頃であり、自身のものとしてこのテーマにぶつかり本にしようと思いついたのは43歳の時であった。それから7年をかけて本書を完成させた。著者の人生は実にこの本を書き上げるべく整えられていたのではと思わせるほど、精魂込められた迫力ある作となっている。さらに、国内外の著名人による人生書の紹介や詩や小説、哲学の一節の引用など豊富な文献の数々は、著者の広範な研究歴と読書量を感じさせる。

本書を深淵な人生哲学の一書としているのは、著者が、精神科医として17年間に渡り長島愛生園（ハンセン病療養所）で勤務した経験が大きい。そこでの診療や精神医学的調査、

人生相談、日常生活を通して得た患者さんとの交わりは、著者の人生観に大きな影響を与えている。精神医学調査では、回答者の約半数以上の患者さんが、将来になにも希望も目標も持っていないという結果だったという。しかし、ここでの生活にかえて生きる意味に尊厳さや人間の本質に近づき得ると感じると言った青年がいた。彼は、将来、人を愛し、己が生命を大切にしていきたいと思うと述べ、それが人間の望みであり、目的だと言うと自分の意志を表現した。著者は、この青年に虚勢でない、この青年の存在そのものから流れで、いきいきしたものを強く感じたのだった。「彼はかなりの重症で、松葉杖にすがって歩いている体は長年の病で衰え、数年後に亡くなったが、彼は多くの詩を残していった」と記している。著者は、「同じ条件のなかにもあるひとは生きがいを感じられなくて悩み、あるひとは生きるよろこびにあふれている」のはなぜか、違いはどこから来るのか、という問いへの答えを求めて、本書の執筆へと駆り立てられていった。「ねてもさめても『生甲斐』を考え、その中に私のすべてをぶちこみたい願いに燃える」と『生きがいについて』執筆日記に綴っている。執筆を続けながら著者は、内面から湧きあがる思いをこの一冊にぶつけていったのである。本書の最後には、ここで「精神科医として働くことは大きな生きがいの一つである」と締めくくっている。

「人はなぜ生きるのか」、誰もが人生の中で一度は自問するのではなかろうか。人間の永遠の「問い」とも言えるこのテーマに対し、著者は正面から向き合いその生涯を傾けて本書を書きあげていったのである。